神門寺境内廃寺

― 第１次発掘調査概報 ―

1983年３月

出雲市教育委員会

神門寺境内廃寺

― 第１次発掘調査概報 ―

1983年3月

出雲市教育委員会

はじめに

市内でも有数の古刹として広く知られている神門寺は、島根医科大学にほど近い出雲市塩冶町に所在し、境内にある礎石が物語るように、古代にも寺院があったところであります。

島根医科大学の開学を契機として、土地区画整理事業による宅地化が進み、長閑な田園風景も急激に姿を変えつつあります。そうしたなかにあって、早急に古代寺院の寺域を確認するために、発掘調査を実施いたしました。これまでいろいろな遺物が出土してはいますが、一度も発掘調査が行なわれておりませんので伽藍配置や寺域など未だ推定の域を出ていないのが実情であります。

今回の調査によって、大規模な古代寺院であったことがほぼ明らかになりましたので、今後の調査によって、さらに詳しく解明されることと存じます。

ここに、調査にご指導ご協力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和58年３月

出雲市教育委員会

教育長　清　水　　寛

例　言

1．　本書は、出雲市教育委員会が昭和57年度に国庫・県費の補助を得て実施した出雲市塩冶町所在の神門寺境内廃寺の調査概要である。

2．　調査は57年８月16日から30日、10月25日から11月10日までの二期間実施し、その後若干の補足調査を行った。

3．　調査体制は次のとおりである。

調査指導者　山本清（島根大学名誉教授）、田中義昭（島根大学法文学部助教授）、町田章（奈良国立文化財研究所集落研究室長）、池田満雄（出雲市文化財審議会委員）、森山美具（同委員）、勝部昭（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長）、西尾克己（同主事）

調査員　今岡清（出雲市教育委員会社会教育課係長）、川上稔（市立出雲図書館主事）、大国晴雄（大田市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員　遠藤浩己、千賀康弘、長見康弘（以上島根大学学生）

事務局　曽田謙介（出雲市教育委員会社会教育課長）、安井奨（同主事）

4．　調査にあたっては、神門寺をはじめ地元各位の協力があった。

5．　本書の作成は、池田、今岡、勝部、川上、西尾が携り、編集は川上、西尾が行なった。また、図版作成には井上洋子、田根裕美子氏の協力を得た。

目　次

はじめに
例　言
1．　調査に至るまでの経過 …… 1
2．　位置と環境 …… 2
3．　調査の概要 …… 6
(1)　発掘の経緯 …… 6
(2)　遺構と遺物 …… 6
4．　調査に関連して …… 12
(1)　寺域の推定 …… 12
(2)　神門寺付近出土の軒丸瓦について …… 17
(3)　神門寺東側堀沿いの植物 …… 21

1.調査に至るまでの経過

出雲市塩冶(えんや)町に所在する神門寺の境内から古代の瓦などが出土することは古くから知られており、また境内庫裡裏には、当時のものと思われる礎石が今も残っている。出雲地方の初期仏教文化を知るうえで貴重な資料を提供している神門寺境内廃寺は、遺物の表採のみで遺構は未だ知られていない。

近年、島根医科大学の開学によって周辺の道路・土地区画の整備が進み、都市計画路線に神門寺の東にある市道の拡幅が予定されていることもあって、神門寺境内廃寺の寺域を早急に確認する必要がでてきた。そのため、昭和57年度文化財保存事業費国庫補助事業として、大田市教育委員会大国晴雄主事と島根県教育委員会の協力を得て発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和57～59年度継続事業として計画した。とりあえず今年度は、夏期に神門寺の南と北の畑地を対象として実施することにし、稲の取り入れのおわる秋期に東の水田に調査区を設定することにした。

発掘調査の主な目的は、神門寺境内廃寺の寺域確認調査であったため、廃寺の境界と覚しき地区に細長いトレンチを設定して調査することにした。なお、西の境界については、来年度に譲り、今年度調査には入れなかった。

図版1　神 門 寺（南から）

2. 位置と環境

神門寺は、神戸川が出雲平野に注ぎ込む出雲市塩冶町の平地に存在し、西側には沖積低地を隔てて神戸川が流れ、東側には低丘陵が、また、南側には島根医科大学が位置する。本寺は天応山と号する浄土宗（古くは天台宗）の古刹で、幽寂な境内には塩冶判官高貞の墓と伝える五輪塔や塩冶氏累代のものといわれる宝篋印塔が数基認められ、また寺域の北側と西側には土塁が残り、大規模な堂宇とともに往時の勢力を偲ぶことができる。

さて、寺の付近の微高地は、神戸川の旧自然堤防に属し、付近には天神遺跡、高西遺跡塩冶小学校付近遺跡等の集落跡が広がり、出雲平野中央部の遺跡密集地の一角に当る。弥

図1　神門寺境内廃寺と周辺の主要遺跡

1.大社境内遺跡　2.原山遺跡　3.菱根遺跡　4.大寺古墳　5.矢野遺跡　6.大念寺古墳
7.西谷墳墓群　8.築山古墳　9.上塩冶横穴群　10.古志本郷遺跡　11.多聞院遺跡　12.福知寺山横穴群
13.鳶ヶ巣城跡　14.平家丸城跡　15.向山城跡　16.大井谷城跡　17.半分城跡　18.浄土寺山城跡
19.天神遺跡　20.神門寺境内廃寺　21.長者原廃寺

生時代の遺跡としては、平野西部に存在した神門水海に面した低地に、貝塚を伴う矢野遺跡や知井宮多聞院遺跡をはじめ多数の弥生時代の遺跡が点在する。また斐伊川が平野に流れ出る西谷丘陵上には、弥生後期末に属し四隅突出型方形墓を中心とする西谷墳墓群が存在する。

古墳時代の遺跡も数多く存在するが、前期から中期に属する古墳では、大寺古墳をはじめ数基が知られるに過ぎない。後期には、神戸川流域を中心とする平野南方の低丘陵上に横穴式石室をもつ古墳や、山腹に穿たれた横穴群が多数出現する。著名なものには、大念寺古墳、上塩冶築山古墳、上塩冶地蔵山古墳、上塩冶横穴群があり、出雲地方でも屈指の古墳密集地帯である。

律令時代には、神戸川流域一帯は神門郡に属しており、 733年に編纂された『出雲国風土記』によると、神戸川沿いの古志郷には、神門郡家や駅家が設置されていた。神門寺の北西 500mに存在する天神遺跡からは掘立柱建物群が検出され、墨書土器や緑釉陶器も出

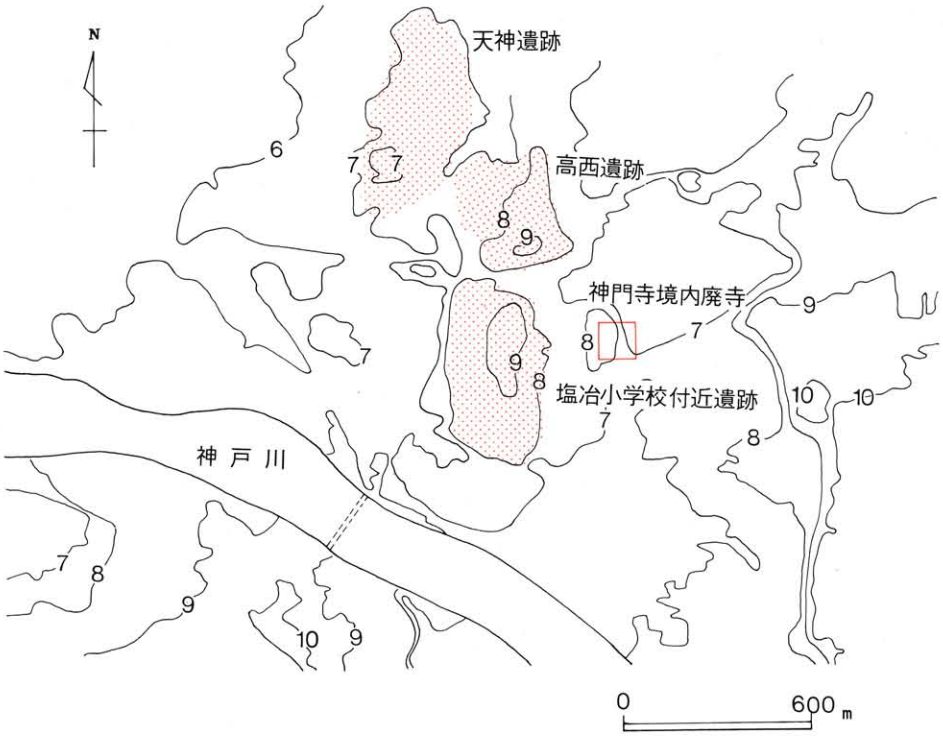


図2　神門寺境内廃寺周辺のコンター図

土し、官衙址の可能性も強い。また、神門郡には二寺が記載されているが、現在確認される奈良時代から平安時代に創建された寺跡は、神門寺境内廃寺、長者原廃寺、古志廃寺、大寺廃寺があり、瓦類が出土している。

鎌倉時代には、この塩冶一帯は出雲国守護職の佐々木（塩冶）氏が領するところとなり出雲国の政治的中枢地となった。高貞没後は出雲東部の富田（とだ）郷へ移った。室町時代には尼子経久の子塩冶興久が一時期支配していたが、1532年に乱をおこし滅んでいる。この時期に属する城跡としては、平家丸城跡、向山城跡、大井谷城跡、半分城跡がある。また、塩冶氏にかかわる社寺としては、観音寺、浄音寺および塩冶神社が知られている。

図版２　神門寺の航空写真（西から）

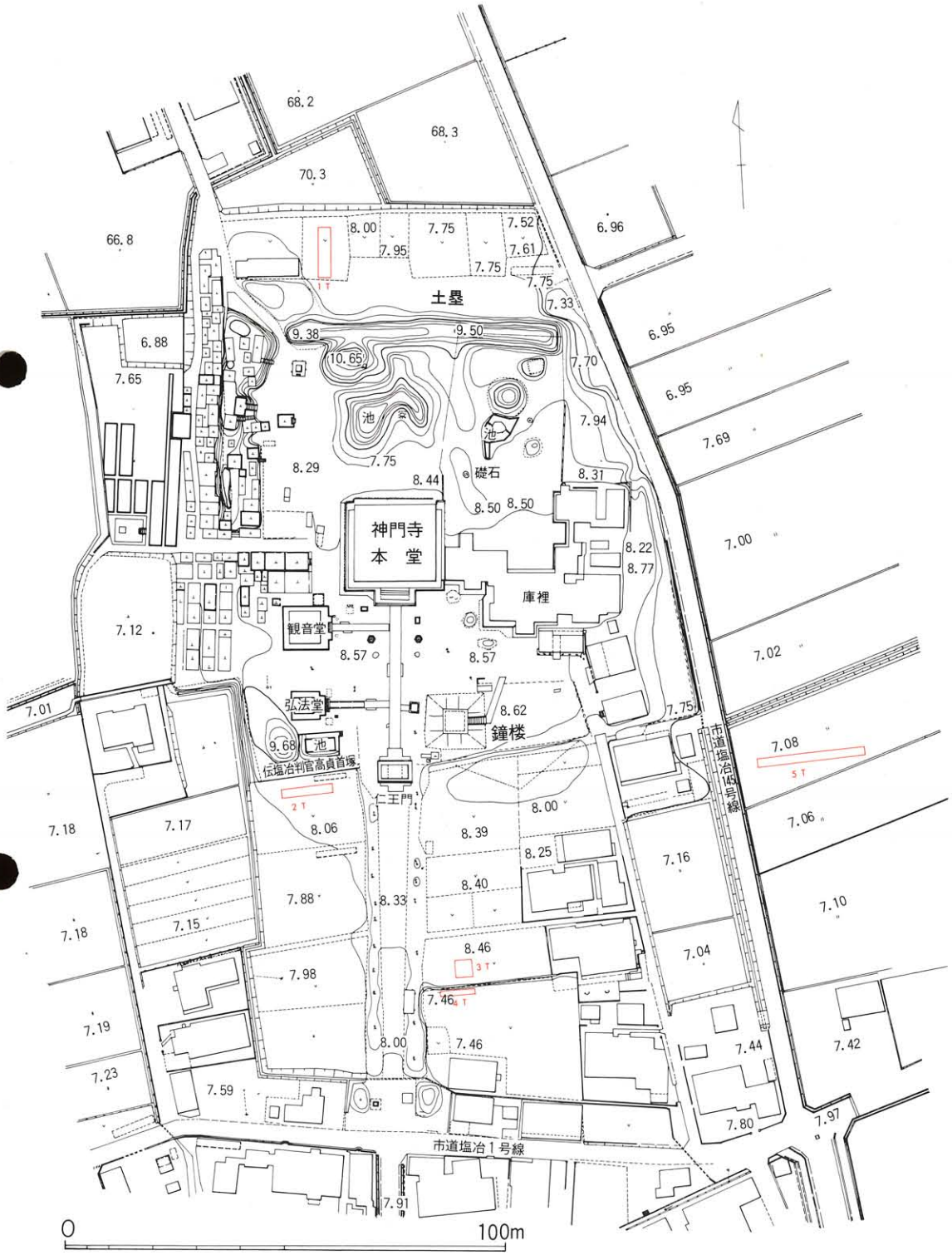


図３　神門寺境内廃寺　地形測量図

3. 調査の概要

(1) 発掘の経緯

神門寺境内廃寺跡の寺域確認のための発掘調査は、昭和57年８月16日～30日と、10月25日～11月10日の両期間実施した。夏期の調査では、神門寺の南と北にトレンチを入れ神門寺境内廃寺の南と北の寺域確認と遺物出土状況を調査し、秋期の調査では東の寺域確認を主眼とした。西の寺域確認調査は実施していない。

調査の結果、古代の寺域を断定するまでには至らなかったが、東側の調査では、神門寺所蔵の古絵図にある江戸時代の神門寺の東側を囲繞する溝の一部が確認できた。

南側では参道の中ほどの位置で、段差のある畑地の上部と下部にそれぞれトレンチを配し、遺構および遺物の出土状態をみたが、寺域を確認するほどの資料は得られなかった。

北側には、一本のトレンチを南北に設定した。遺物は各々のトレンチのなかでは最も多く出土したが、寺域を画する溝等の施設は皆目見当らなかった。

また、発掘調査にあわせて、神門寺境内とその周辺36,000㎡の地形測量を業者に委託して実施したほか、神門寺に所蔵する古文書の解読を行うとともに、明治９年(1876)作製の塩冶村道水路図等に基く小字・古地名などの文献調査を実施した。

(2) 遺構と遺物

今回の調査は、前述した様に寺域の確認に主眼を置くものであり、トレンチを神門寺の周囲にある畑地と水田に計５本を設けた。

第１トレンチ

本堂の裏手に位置する土塁の北側に幅３ｍ、長さ12ｍのトレンチを設定した。層序は上から耕作土、褐色土層、茶褐色砂質土層となり、褐色土層と茶褐色砂質土層に瓦類等の多量の遺物を含んでいる。

遺構としては溝状遺構５、ピット14、瓦溜１、その他を検出した。溝状遺構はトレンチの西寄りに存在し、長さ80cm、深さ60cmで、底部からは土製支脚とカマドの破片が出土した。ピットは径20～70cmで、深さ20～30cmを測り、浅いものが多い。調査面積が狭いため建物跡になるかどうかは定かでない。トレンチの北西隅には厚さ３～４cmで、内部空洞の長方体状の遺構がある。素焼状であるが、天井部と床部がなく、土師質土器等を焼く窯跡であるかも知れない。内部から土師質土器が１個出土している。また、瓦溜は床面のレベルで、トレンチ中央部西側で発見された。

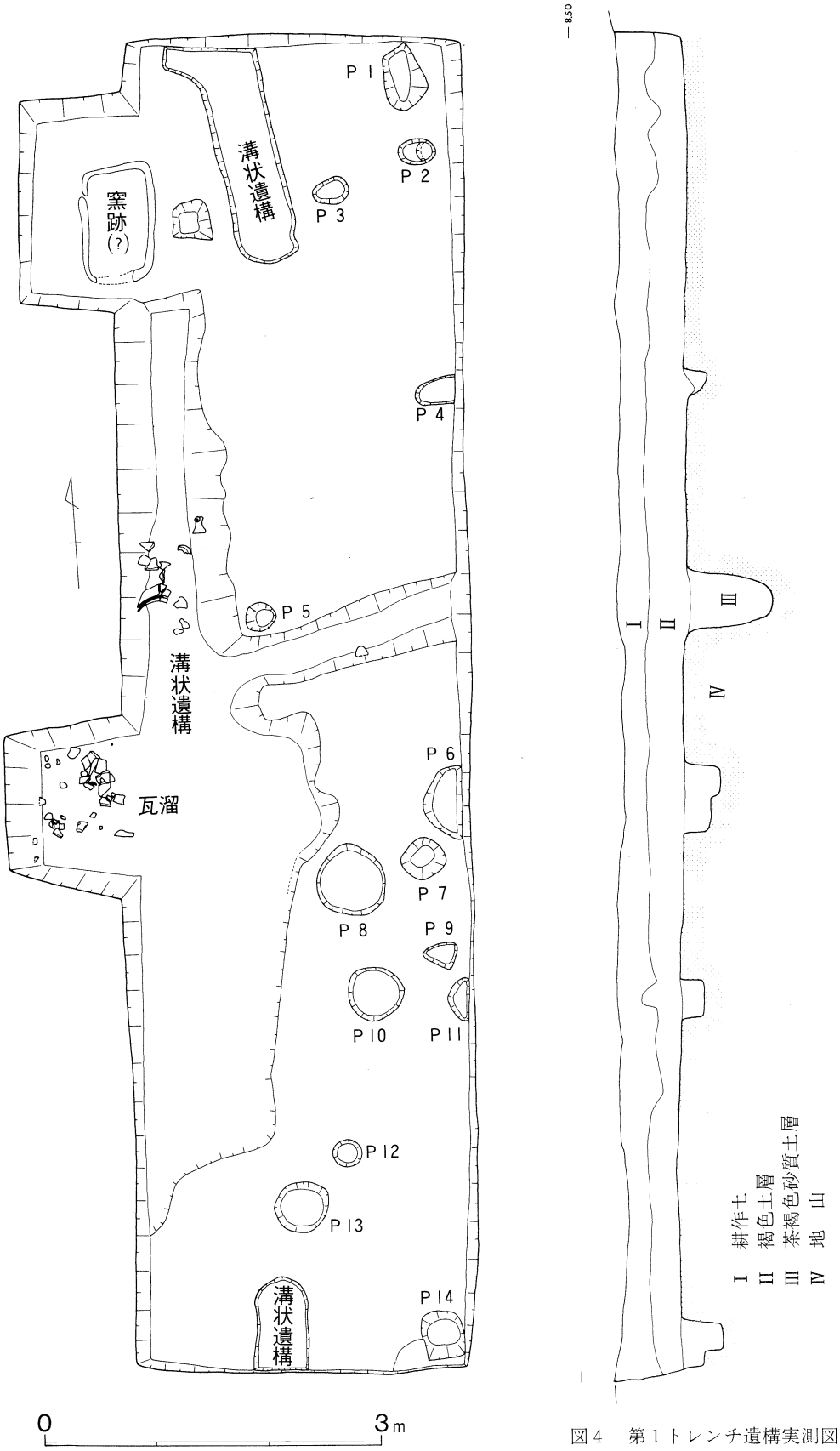
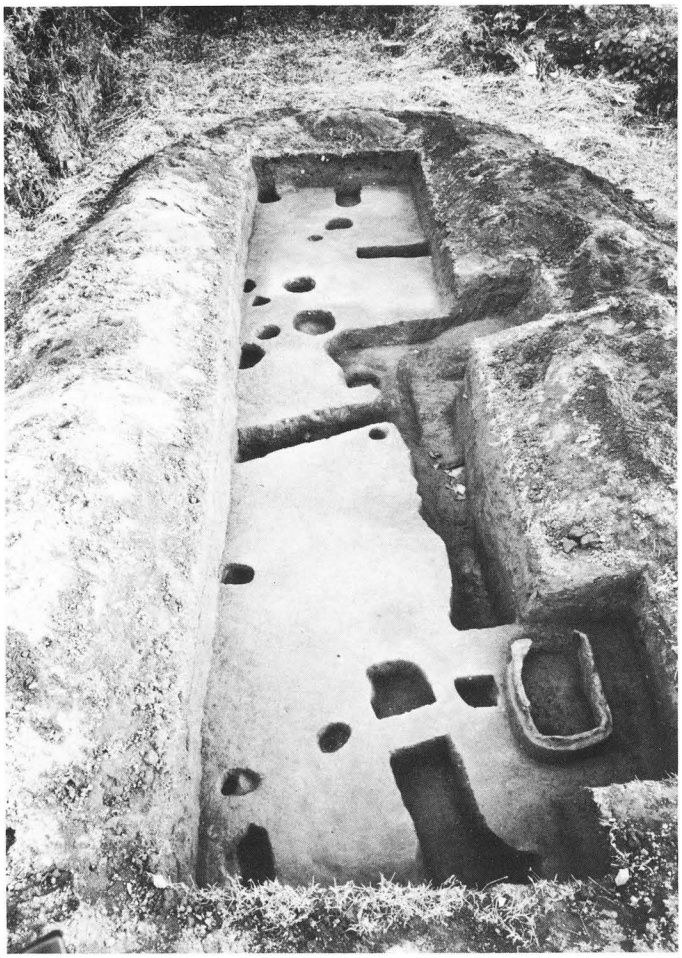


図4　第1トレンチ遺構実測図

遺物としては、須恵器、土師器、土製支脚、瓦類、石器があり、その多くは瓦類が占める。須恵器で形が窺えるものとしては、口縁部から体部にかけて大きく開く坏が１個あるだけであるが、口径11cm、器高は 2.6cmの小形品で、体部はヨコナデ、外部底部はヘラ削りを施す。土師器は溝から出土した甕とカマドがある。瓦類では、平瓦と丸瓦が多く、丸瓦には行基式と玉縁付式のものがある。平瓦は表面に格子目や縄目の叩きが、内面には細かい目の布目痕が残る。また、蓮華文の軒丸瓦と鬼面文の鬼瓦の破片が各１片が発見されている。なお、石器には石斧１とその未成品が数個出土している。



図版３　第１トレンチ（北から）

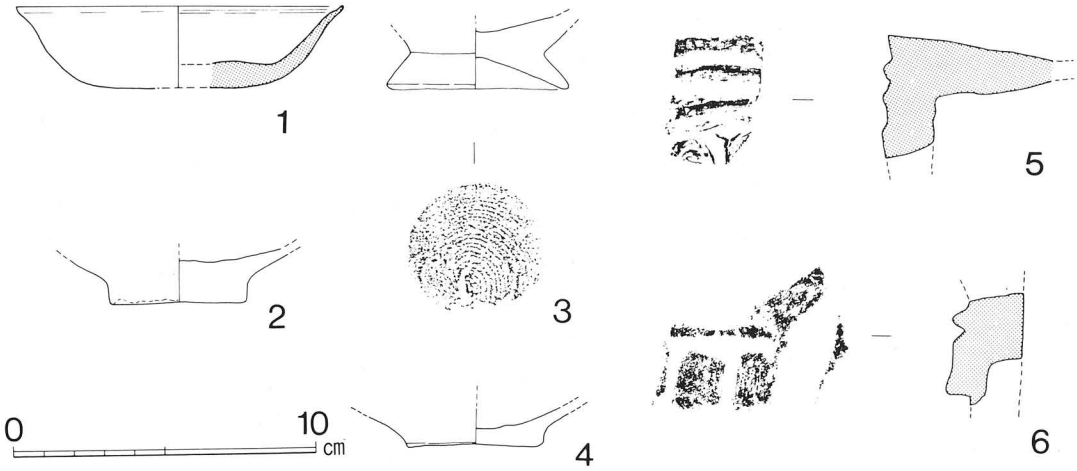
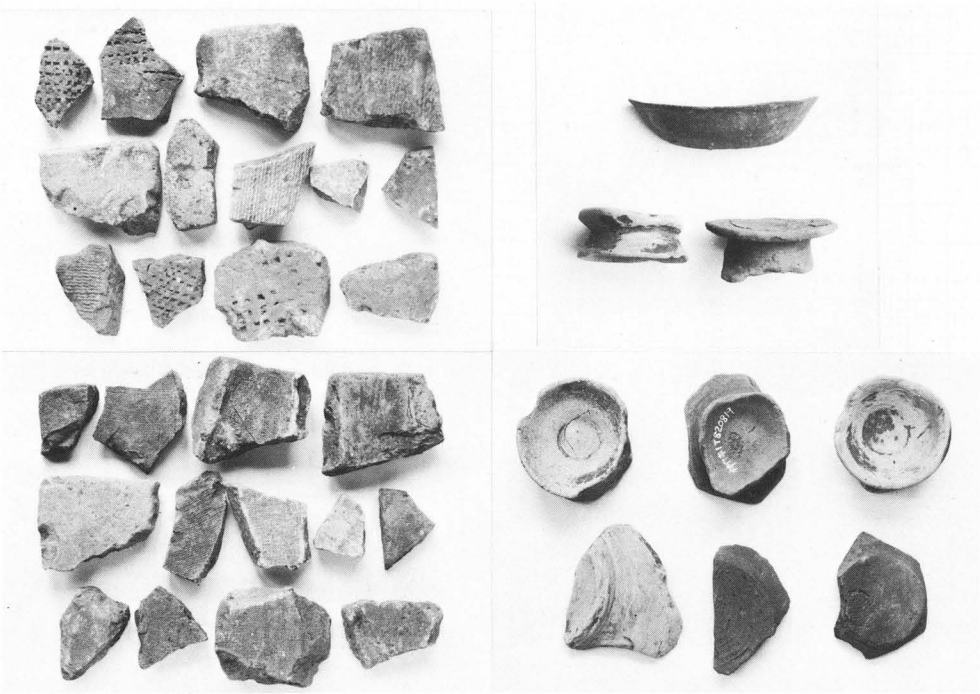


図５　第１トレンチ出土遺物実測図



図版４　　第１トレンチ出土遺物

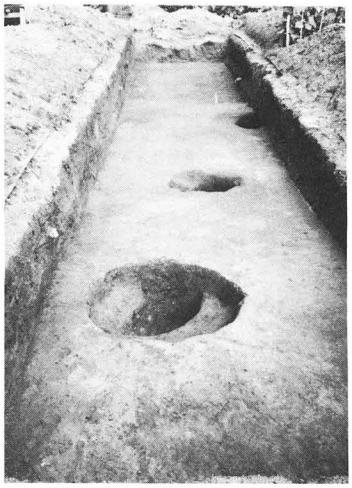
第２トレンチ

仁王門の西側に隣接する畑地に、幅２ｍ、長さ12ｍのトレンチを東西方向に設定した。このトレンチからは直線状に並ぶ３個のピットを検出しただけである。径は60～100cmで、深さは40cmを測る。時期や性格は不明である。

遺物としては、少量の土師器と瓦類がある。

第３トレンチ

神門寺境内から南へ伸びる参道の東側の畑地で４×４ｍを調査した。層序は表土の下に褐色土、茶褐色土があり、地山までの深さは80cmを測る。



図版５　第２トレンチ（西から）

遺構としては、トレンチの北西から南西に点綴する石列と南側の土壙が検出された。石列は人頭大のものが数個、列をなす様に配置されてはいるが、その性格は不明である。土壙は50cm×160cmの東西に長く、深さは10cmで浅い。内部から遺物が出土していないので、時期や性格は定かでない。

遺物としては、弥生時代後期の壺と高坏、中・近世の土師質土器と陶磁器および砥石が出

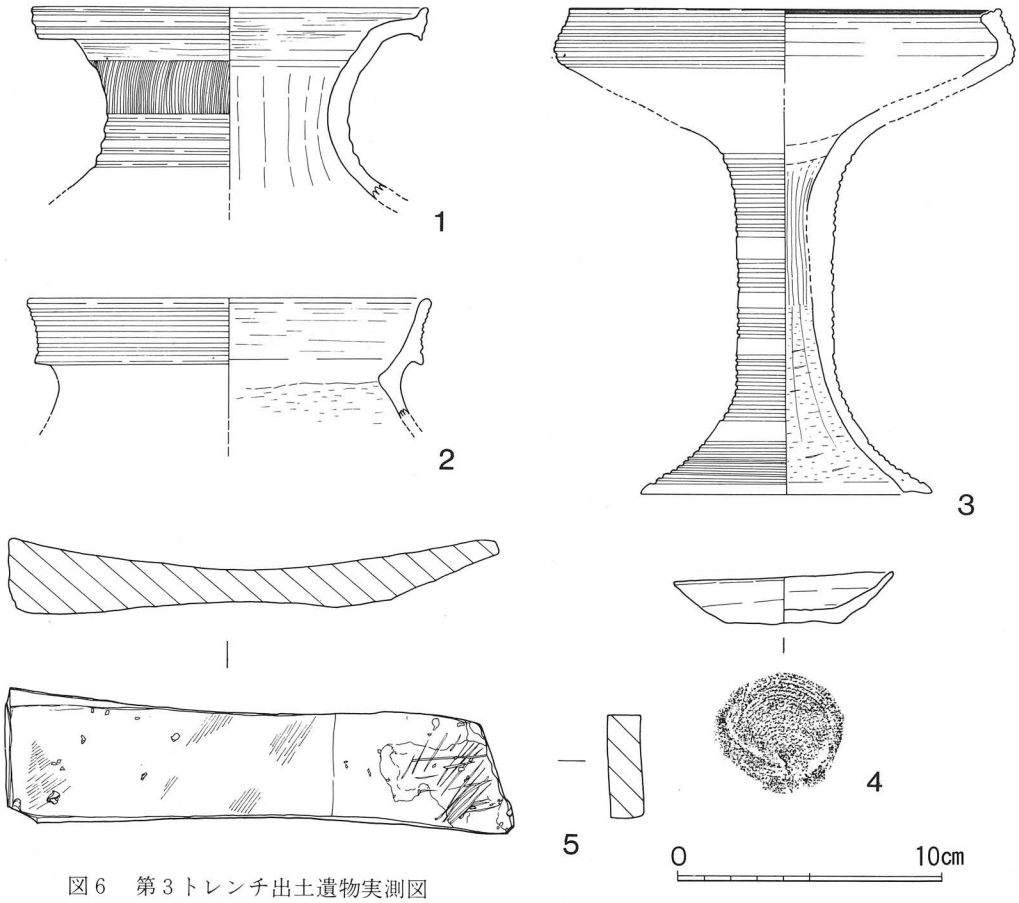


図6　第3トレンチ出土遺物実測図

土している。この弥生土器より、この微高地は寺院成立以前より生活面として使用されていたことが知られる。

第4トレンチ

第3トレンチ南に接し、比高が約1m低い畑地に、東西1.5m、南北8mの細長いトレンチを設けた。

遺構としては、東側に径4m、深さ60cmの大形の土壙を1個検出した。内から弥生土器の底部が1片出土しているが、その性格は不明である。土壙外の遺物には、弥生土器と中・近世の陶磁器の破片が少量発見されている。

図版6　第4トレンチ（西から）

第5トレンチ

神門寺の東方にある水田に南北2m、東西25mの細長いトレンチを設定した。この地

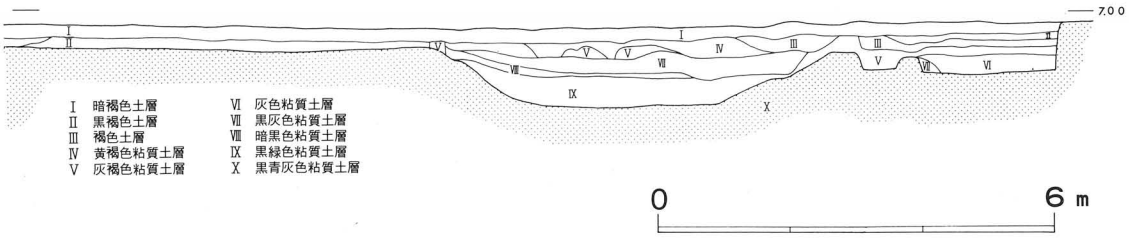
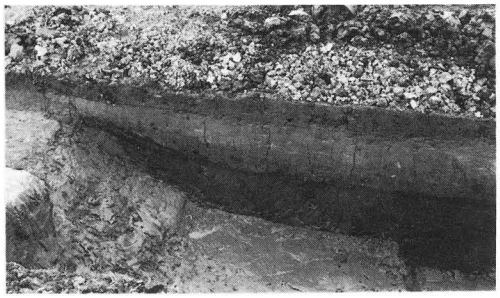


図7　第5トレンチ北壁断面実測図



図版7　第5トレンチ断面（南から）

点は神門寺所蔵の古絵図による濠が存在すると推定される所である。現在は圃場整備されているが、それ以前にあった神門寺の境界が小さい溝とそれに沿った小径であったといわれ、今回の発掘により1m幅の溝と同規模の径が検出され、また、前述の絵図に符合すると推定される大きな溝も下方に存在した。規模は幅4m、深さ1mを測り、内部には水がたたえられていたらしく、松葉や落葉樹の下葉等が多量に堆積していた。さらに、この溝に接した西側部分には大きな松の根が認められ、絵図にある如く溝に沿って松並木も存在したと考えられる。

この溝が存在した時期は、出土品がほとんどなく定かでない。なお、溝内出土の植物については本書中の「神門寺東側堀沿いの植物」で詳細に述べてある。

4. 調査に関連して

(1) 寺域の推定

①遺構の存在　神門寺の境内に古代の廃寺があるということは、昭和20年代になってから知られた事実である。今回初めて発掘調査を試みた結果、奈良時代と考えられる須恵器や瓦等の遺物が発見され、かつまた柱穴などいくらかの遺構が検出された。このことにより、改めて古代の遺構の存在が確認された。

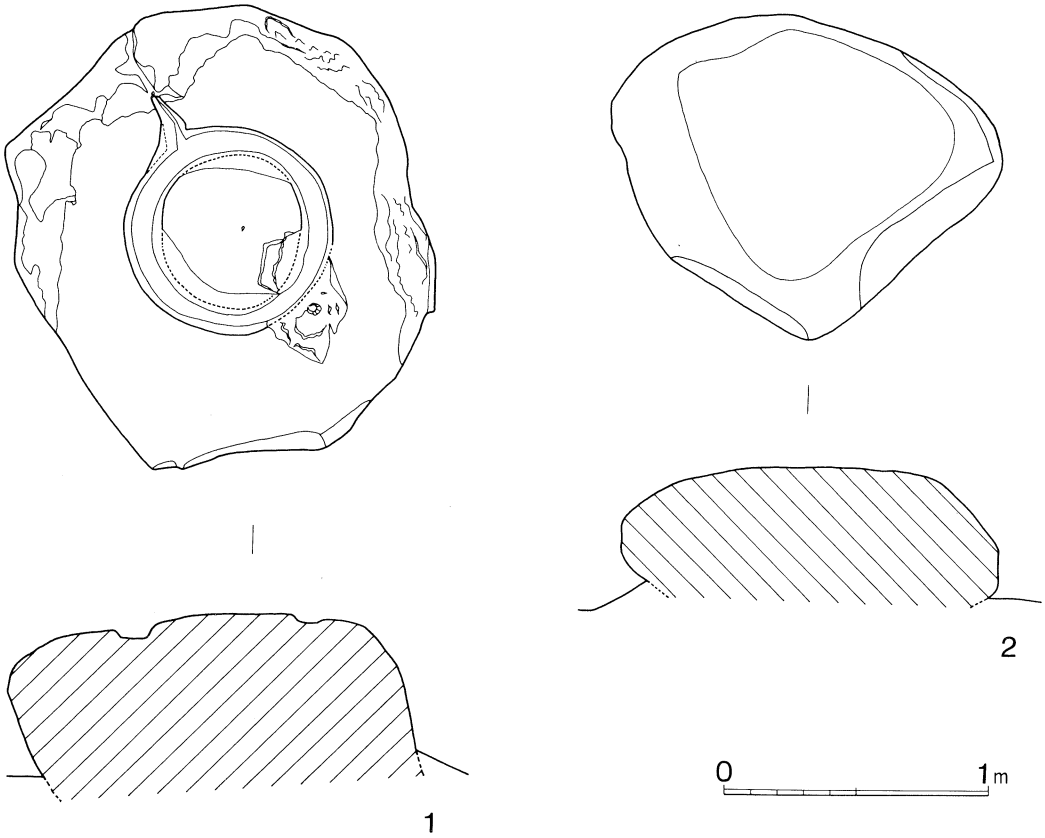


図８　神門寺境内の礎石実測図

②『出雲国風土記』の記述　　神門寺は、現在出雲市塩冶町に所在しているが、古代において行政区画のうえからは神門郡内に属す位置である。『出雲国風土記』によると神門郡には新造院が２ヶ所ある。即ち

新造院一所　朝山郷の中にあり。郡家の正東二里六十歩なり。厳堂を建立つ。神門臣等が造りし所なり。

新造院一所　古志郷の中にあり。郡家の東南一里なり。刑部臣等が造りし所なり。もと、厳堂を立つ。

とある。これまで、この記述に基づき神門寺境内廃寺について江戸時代の『出雲国風土記抄』は方角距離からは朝山郷内ではないかと疑問を抱きながら、朝山郷の新造院をあて、戦後加藤義成氏も移転を考慮しながら朝山郷の新造院をあてておられる。[注1]

郡家の位置は再検討の必要があり、出雲市天神町で発見された奈良時代の官衙遺構と推定される遺跡(天神遺跡)の存在からは古志郷の新造院と見ることも可能であろう。[注2]

③廃寺の寺域推定　　今回の発掘調査対象は、わずかに５ヵ所のトレンチを設定し、合計　138 ㎡の範囲の調査をしたにとどまる。従って、神門寺境内廃寺の寺域について明らかにすることはできなかったが、神門寺の現状、地形のようす、発掘調査の結果などを参考にして推定をしてみたいと思う。

神門寺の現状は、南向きの配置で、南側に幅12～14ｍ、道路幅５～７ｍ、長さ82ｍの松並木の参道がある。この参道はＮ８°Ｅ の向きである。南端は市道塩冶１号線と交差する。参道の北端は仁王門となり、そこから北は境内となる。境内には参道と仁王門を結ぶ中軸線の延長線上に本堂がある。本堂は東西25ｍ、南北20ｍの壮大な建物である。この本堂の東側には庫裡がとりついている。本堂の北側には池があり、往時には水をたたえていたと思われるが今は枯れている。庫裡の裏手には庭園がある。本堂の北側と庫裡裏手の庭園には礎石と伝える大石が各１個存在している。

この他、本堂のまわりには次のものがある。本堂に向って左側には弘法堂、観音堂などの堂や塩冶判官高貞の首塚と伝える五輪塔や塩冶一族の墓と伝える数基の宝篋印塔があり、また、現在の墓地も営まれている。一方右側には鐘楼が、本堂の北方には稲荷社もある。

地形のようすは概ね次のようである。仁王門の南、参道の両側は畑で、畑の西と東側が水田であるのに対して高くなっている。参道の両側部分では仁王門から65ｍ南の付近で１ｍの比高差で南側が低くなっている。庫裡の東側は市道をへだてて水田となっている。北側は土塁で境内と画され、その北側には幅30ｍほどの畑があり、それよりも北は水田とな

り、地形的に１ｍ低くなっている。西側は北側から囲む土塁があり、その西は墓地が20ｍばかり続くところや水田部分がある。境内を囲むかのような土塁は北側辺によく残り、西側辺の半分と東側の北の一部に残る。およそ幅10ｍ、高さ1.5ｍである。

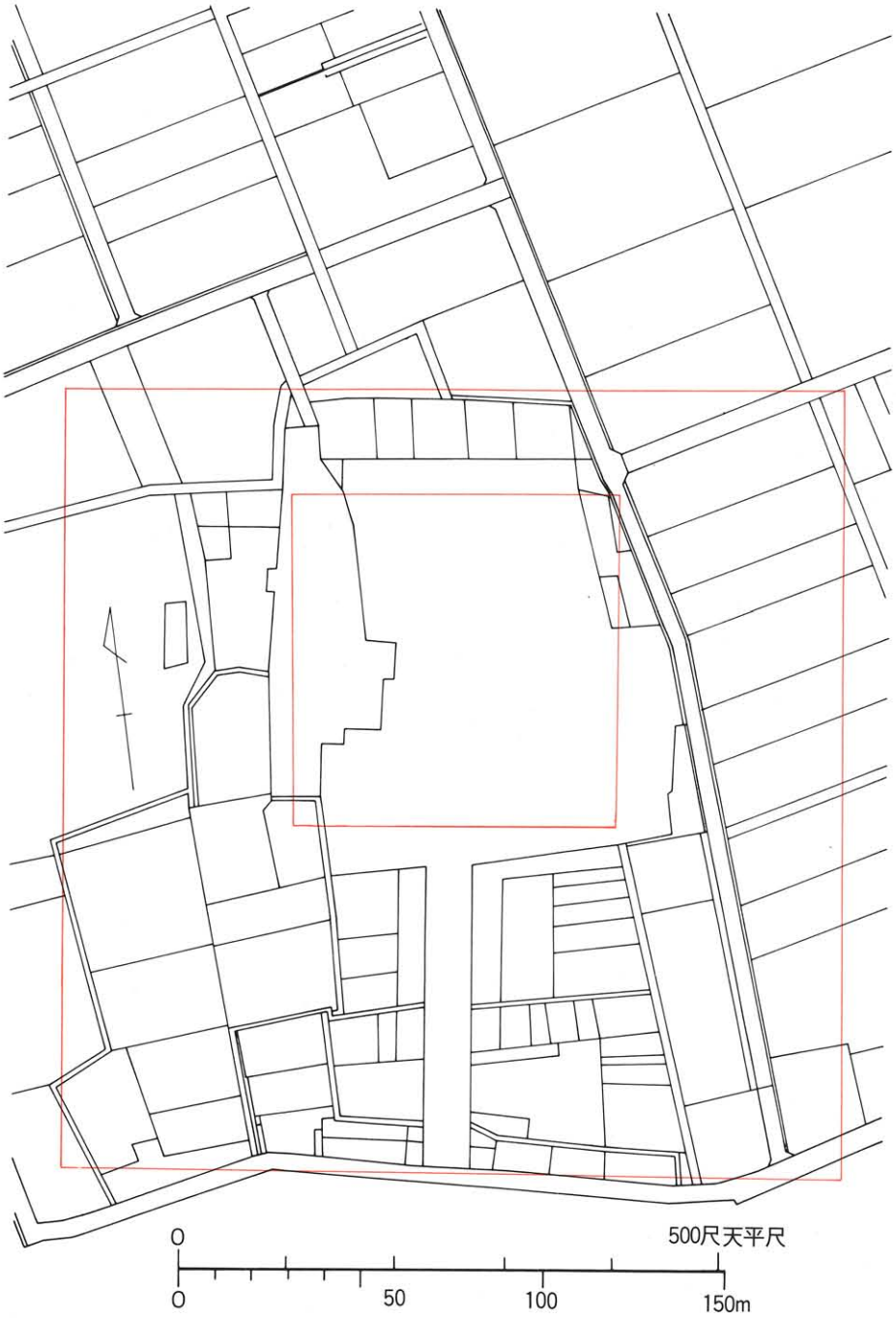


図９　神門寺境内廃寺 寺域仮想推定図

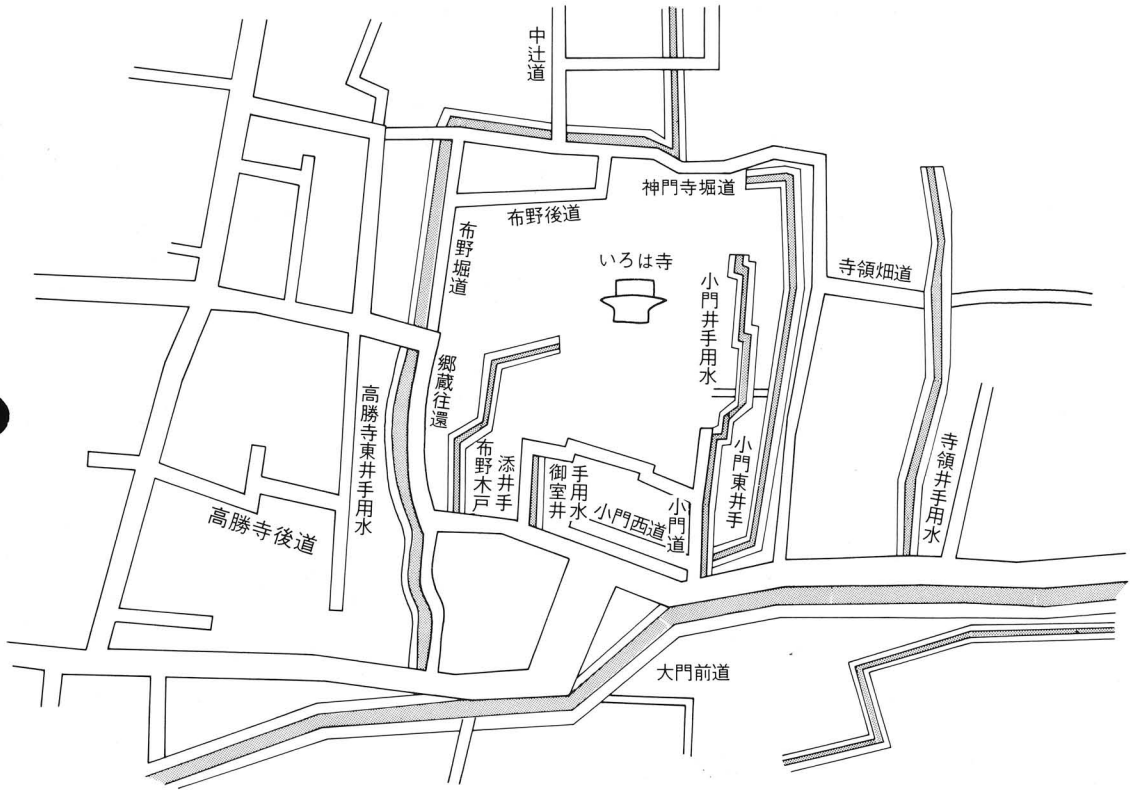


図10　下塩冶村道水路図　1876年（明治９年）

次に発掘調査結果は、境内北方の第１トレンチで柱穴や土壙状遺構を検出し、須恵器、瓦等を発見した。仁王門西側の第２トレンチでは掘立柱建物跡と考えられる柱穴を３個検出したが、参道東側の第３、第４トレンチでは寺に関係する遺構は確認できなかった。境内の東方水田の第５トレンチでは土塁跡かと考えられる土壇とその東側に幅３ｍ、深さ１ｍの溝を検出した。

上述のうち、参道、境内、土塁、畑と水田の境、市道との交差、第５トレンチの土壇ないし溝などを判断の手がかりとすると寺域は次のようではないかと推測される。

寺の中軸線は参道、仁王門、本堂の中心を結ぶ線とする。寺の主要な伽藍の営まれた区域は仁王門を南端とし、西、北、東は土塁によって画された部分とみる。寺を大きく画する区域は南側は参道の南端と市道の交差する地点、北側は畑と水田の境目、東側は第５トレンチで検出された溝を目安とする考えで方画地割をとる。

このように考えると寺の主要部は、中軸線から東側と西側に各150尺とった300尺四方となり、寺を大きく画する区域は中軸線から東西に各360尺とった１辺720尺で、寺域は720尺

四方と考えられる。この場合、南辺は参道と市道の交差点を、北辺は畑と水田との境を通る辺となると考えられる。

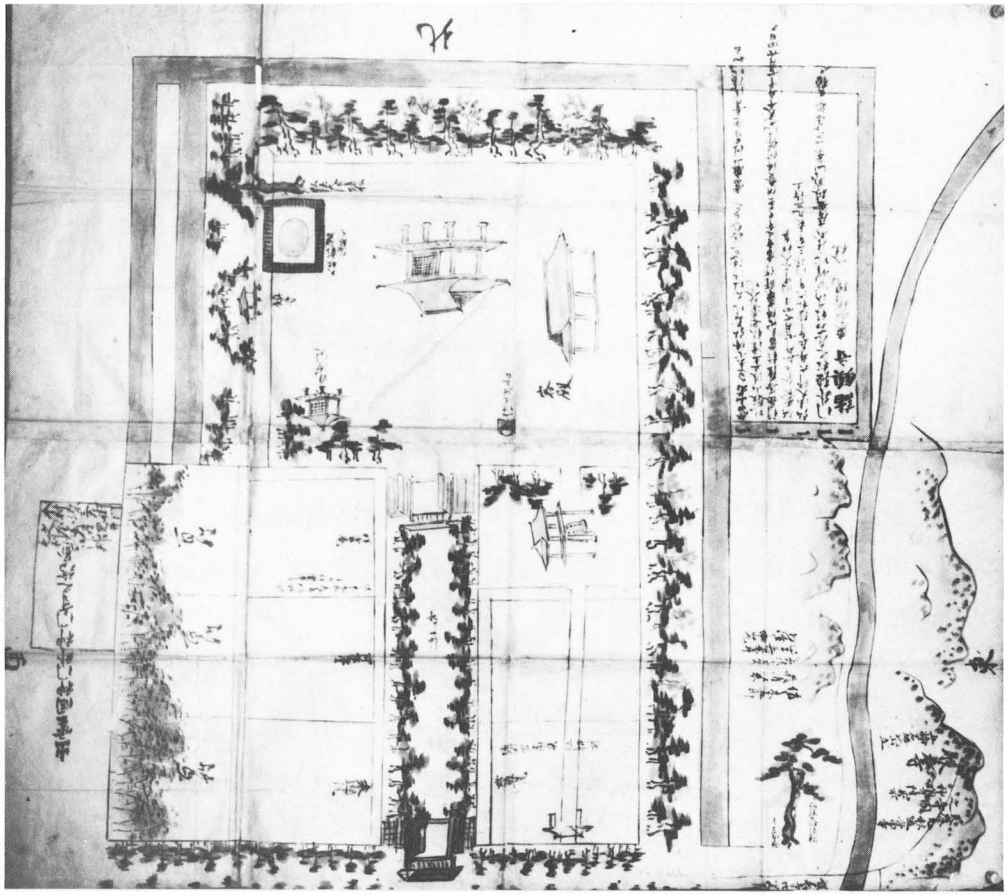
ちなみに神門寺出土のような水切瓦を出土した広島県三次市の寺町廃寺の場合、寺域は270尺(80m)四方[注3]、寺戸廃寺は1町四方[注4]が考えられている。(山本清・勝部昭)

注1　加藤義成『修訂出雲国風土記参究』　1981

注2　山本清「出雲国風土記」(『日本古代文化の探究　風土記』　1975)

注3　三次市教育委員会『備後寺町廃寺』　1980

注4　潮見浩『寺戸廃寺跡発掘調査概報(第1次)』　1970



図版8　神門寺之絵図(神門寺蔵)

(2) 神門寺付近出土の軒丸瓦について

神門寺廃寺出土瓦のうち、瓦当面の下端に三角状の突起をもつ軒丸瓦が注目される。同種の瓦は備後北部をはじめ備中・安芸でも発見され、その特性について逐次究明されつつある。

まず、昭和27年に梅原末治氏が神門寺付近出土の古瓦をとりあげ、備後寺町廃寺・備中大崎廃寺発見の同種瓦とあわせて考察を進めている。[注1] ここで三角状突起をもつ軒丸瓦の特殊性から、大崎廃寺→寺町廃寺→神門寺廃寺の関係が推定された。その間に地方色が指摘されるとともに、中国地方における初期仏教文化伝播の一方向が示唆されると論じられている。

翌28年には村上正名氏によって備後寺戸廃寺出土瓦に三角状突起をもつものが認められ、寺町廃寺と神門寺廃寺の間をつなぐものとして注意された。[注2] また、豊元国氏は三角状突起瓦について「水切り」説（石田茂作氏の意見）を紹介している。[注3] 続いて昭和30年には備後康徳寺廃寺瓦も明らかにされた。[注4]

昭和32年、近藤正氏はいわゆる水切り瓦を整理して、備後寺町廃寺から備中大崎廃寺・備後寺戸廃寺・出雲神門寺廃寺に移行したと説き、後三者の瓦の尖部に簡略化がみられることは機能の減退を意味するとした。[注5] 近藤氏は昭和43年に『出雲国風土記』にみられる新造院について所論を発表したが、そこで神門寺廃寺を神門寺朝山郷の新造院に比定している。[注6]

昭和44年にいたって、松下正司氏がいわゆる「水切り瓦」の様相について究明した論文を提示した。[注7] その中に軒丸瓦の編年表をあげているが、神門寺廃寺瓦ＦＩ式を奈良後期の中頃、同ＦII式を奈良後期末～平安初期に近いものとし、朝山郷新造院に比定する近藤説を批判している。また、水切り説について検討し、軒丸瓦における水切りの必要性は稀薄で、三角状突起は当初（寺町廃寺ＳＩ式）成形痕であったものが瓦当を飾る文様の構成要素として発展したものと推察している。

いっぽう、昭和45年に刊行された『飛鳥白鳳の古瓦』において、稲垣晋也氏は蓮華文鐙瓦(軒丸瓦)を分類する中で神門寺廃寺瓦を第６類（複弁）第４様式のＥ（重圏文縁）花弁端円形反転（水切り付き）形式として位置づけた。そして寺町廃寺の同形品とともに白鳳時代後半（天武末年から持統朝）の時期に比定しており、松下氏の所論と大きなずれをみせる。[注8]

なお、昭和44年以降前後して備後寺戸廃寺跡・安芸横見廃寺跡・備後上山手廃寺跡・備後寺町廃寺跡の発掘調査が進められ、三角状突起をもつ軒丸瓦の出土例も増え、寺院跡の

神門寺廃寺軒丸瓦計測表　（単位cm）

	直径	内区							外区			厚さ
		中房		連子数	弁区径	弁長	弁幅	弁数	幅	高	文様	
		径	形									
I類	(19.6)	6.3	凸圏	1＋4	12.2	3.0	3.1	8	2.9	0.3	二重圏	2.0
II類	(17.9)	4.6	凸連珠帯	1＋7	12.0	2.3	2.8	8	2.6	0.2	〃	2.3

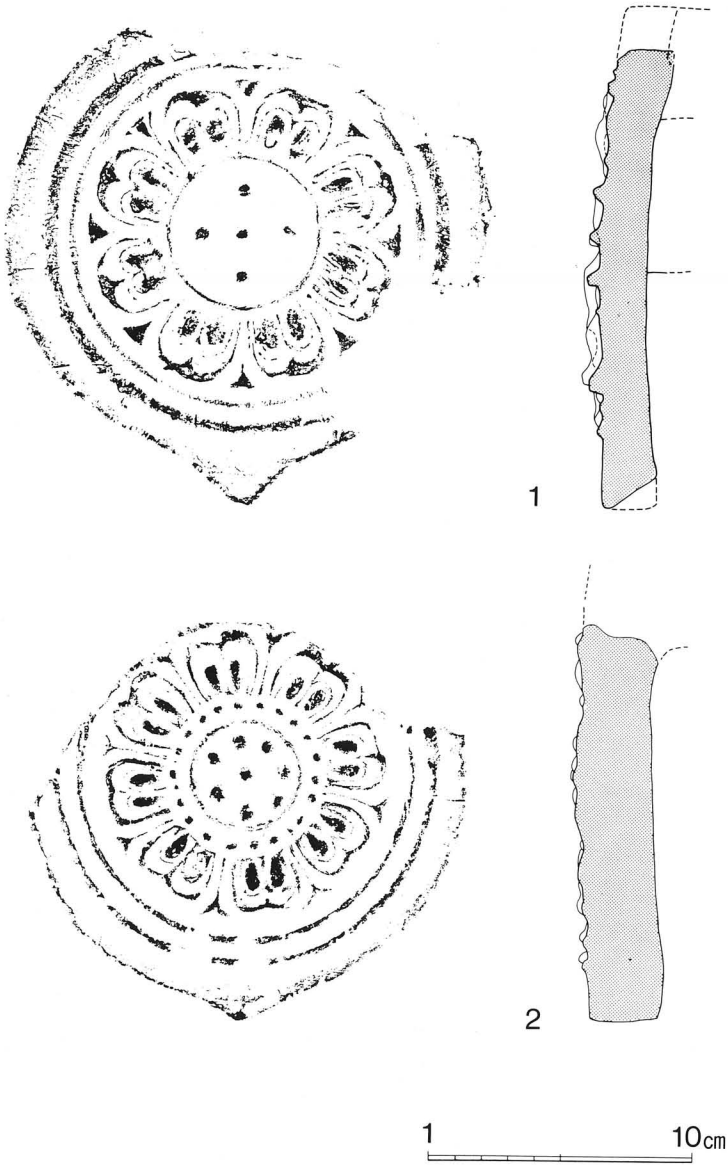


図11　神門寺境内付近出土軒丸瓦

様相も次第に明らかにされてきている。[注9]

次に神門寺廃寺軒丸瓦についての計測表を示し、若干の考察を試みることにしたい。

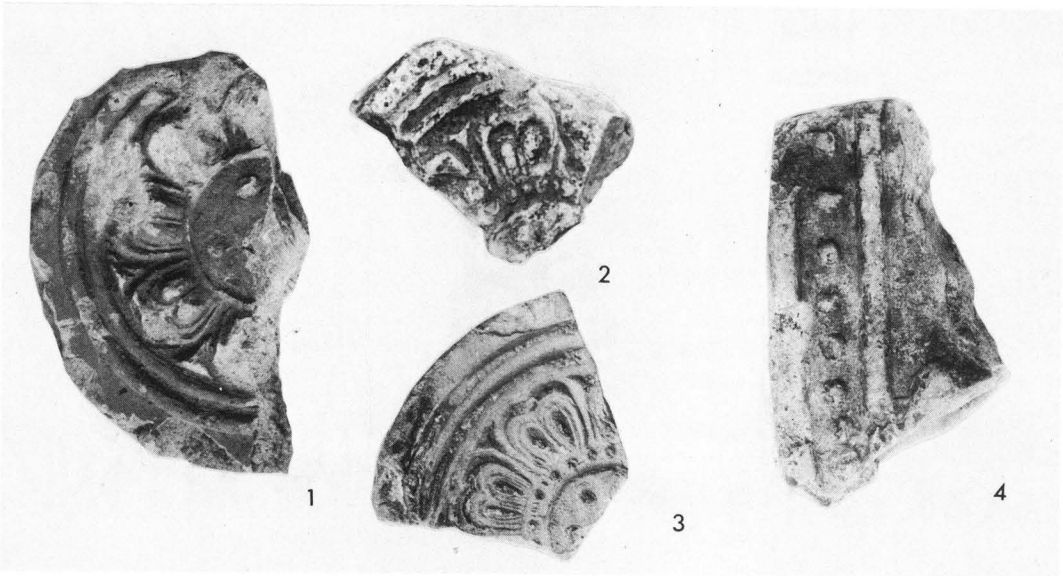
Ⅰ類（神門寺蔵品）

八弁複弁蓮華文。中房は平らでわずか中央に盛り上りをみせ、１＋４の蓮子を配し周囲に圏線をめぐらす。花弁の弁端は円形で先端が反転し、弁中の子葉は細い輪郭をつけた重弁式である。外周には太い二重圏をめぐらし、周縁は平縁で下端に三角状の突起を削り出している。突起は内反りの明確なものである。この神門寺廃寺軒丸瓦Ⅰ類は、松下正司氏が備後寺町廃寺ＦⅠｂとされるものに最も近く、文様構成は類似し大きさもほぼ等しい。瓦当と丸瓦の接合の仕方は接着法をとっている。色調は灰青色の硬質なものであるが、焼き歪みがみられる。

Ⅱ類（井上狷介氏採集品）

八弁複弁蓮華文。中房は低い凸形で１＋７の蓮子を配置し、それをめぐって22個からなる連珠文帯がみられる。花弁の肉付はⅠ類よりやや薄いが、外区周縁の作りはⅠ類と同様で二重圏をめぐらす。下端突起はⅠ類ほど大きくないけれども明確に認められる。色調は灰色、焼成は良好で、Ⅰ類にくらべ厚手に作られている。瓦当と丸瓦の接合は、Ⅰ類と異なり印籠つぎ法である。

ところで、軒丸瓦瓦当下端の三角状突起手法の祖形は、『日本霊異記』所載の三谷寺にあたると考えられる備後寺町廃寺跡出土の素弁文瓦（ＳⅠ式）に認められる。これは百済



図版９　神門寺境内採集瓦（１は軒丸瓦Ⅰ類，２・３は同Ⅱ類，４は鬼瓦片）

の素弁文瓦によく似ており、660年代前半の作と推定されている。[注10] この軒丸瓦瓦当下端の尖りは、寺町廃寺では最古のものから平安時代の瓦までひき続いてみられる。特色ある手法は素弁文瓦（Ｓ式）から複弁文瓦（Ｆ式）に受けつがれ、備後北部を中心に備中・安芸・出雲に分布する。その中にあって神門寺付近出土軒丸瓦の時期について諸説が提示され、新造院比定にも問題を投げかけている。いずれにしても瓦の様式上からの編年であり、今後に課題がのこされるものといえる。

軒丸瓦をはじめ各瓦の様式や製作法の詳細は検討をおこなえば、他の寺跡との関係、工人集団の動向や生産状況等をつかむことができよう。そして、遺跡調査の成果とあわせ建立者の性格をはじめ社会的・政治的問題を追究することも可能となってくる。（池田満雄）

注１　梅原末治「古瓦についての一二の覚書」(『史迹と美術』22の８、昭和27年）
注２　村上正名「備後における白鳳寺院址二題」（『史迹と美術』23の６、昭和28年）
注３　豊元国『広島県古瓦拓本集』（第１期第１輯解説、昭和28年）
注４　豊元国「広島県世羅郡大田村康徳寺址」（『日本考古学年報』３、昭和30年）
注５　近藤正「備後・寺町廃寺址と二三の寺院址に関する一つの試み」（『歴史考古』１、昭和32年）
注６　近藤正「『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者」（『日本歴史考古学論叢』２、昭和43年）
注７　松下正司「備後北部の古瓦―いわゆる「水切り瓦」の様相―」（『考古学雑誌』55巻１号、昭和44年）
注８　奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』（昭和45年）
注９　三次市教育委員会『寺戸廃寺跡発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ（昭和45・46年）
　　広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（昭和47、48、49年）
　　広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（昭和54、55、56年）
　　三次市教育委員会『備後寺町廃寺』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（昭和55、56、57年）
注10　古代史発掘９『埋れた宮殿と寺』（昭和49年）

神門寺東側堀沿いの植物

1. マツの球果（マツカサ）・松葉・松の樹皮・松の枝に葉のついたもの

　これらから、松があったものと思われる。一般にクロマツは海岸線に沿って分布し、アカマツは海岸線より離れて育つから、クロマツと思われるが、クロマツかアカマツかについては不明。

2. スギの球果　　少量見つかった。
3. シイの類　　ツブラジイかスダジイか不明。あるいは両方が共生していたとも考えられる。
4. ヤブニッケイ　少量。
5. ヒサカキ　　シイより少ないが、点々と見つかる。
6. カシワかナラガシワ　　少量。
7. カヤツリグサの類
8. タケかササの類
9. ヒシの実

総合してみると、松とシイを主とした高木層を形成し、ヒサカキ、ナラガシワ、シイの類を亜高木、低木とした樹林かと思われる。

竹、笹の類もあって、水辺にカヤツリグサの類が茂り、水面にヒシが浮いていたと思われる。（森山美具）

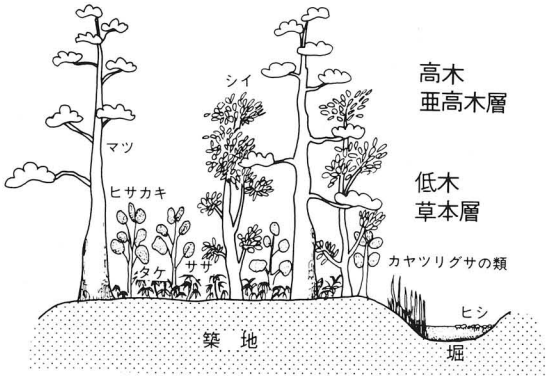


図12　植生推定図

昭和58年３月15日　印刷
昭和58年３月25日　発行

神門寺境内廃寺
— 第一次発掘調査概報 —

発行　出雲市教育委員会
印刷　株式会社　武永印刷